

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19791729
 研究課題名 (和文) アトピー性皮膚炎乳幼児を持つ母親の支援プログラムに関する研究
 研究課題名 (英文) A nursing care program for supporting the mothers of the infants with atopic dermatitis
 研究代表者
 カルデナス 暁東 (CARDENAS XIAODONG)
 園田学園女子大学・健康科学部・助手
 研究者番号：80434926

研究成果の概要 (和文)：

平成 19 年 4 月から平成 21 年 3 月まで、アトピー性皮膚炎乳幼児を持つ母親のスキンケア能力を高める母親支援プログラムを開発し、臨床において、介入群の 13 名、対照群の 10 名に実施した。介入群の母親のスキンケア能力は有意に高くなり、介入群の母親のスキンケアに伴うストレス度は有意に低下した ($p < 0.05$)。介入群の乳幼児の皮膚角質層水分量、皮膚バリア機能は、有意な改善がみられた ($p < 0.05$)。

研究成果の概要 (英文)：

The study was designed as a semi-randomized controlled trial examining the impact of an educational skin care program. After the program, more interventional group mothers developed their skin care ability. Water content of the horny layer and the skin's barrier-function of infants with AD were maintained or improved.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	0	1,900,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	390,000	3,590,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：アトピー性皮膚炎、乳幼児、母親、スキンケア能力、自己効力感

1. 研究開始当初の背景

慢性疾患であるアトピー性皮膚炎 (Atopic dermatitis、以下 AD と略す) は他の慢性疾患と異なり、生命に直接の影響はないものの、痒みのため睡眠障害が生じ、外見上も目立ち、スキンケア・食事など日常生活において様々

な制限が課せられる。さらに長期的な継続した治療を必要とするため、AD 乳幼児の成長・発達過程だけでなく、家族の日常生活にまで影響を及ぼす。日常生活において、スキンケアを継続的に実施することは、AD の治療結果を大きく左右する。

これまでの先行研究の中で用いられたスキンケアチェック表は、乳幼児の皮膚観察の項目のみであった。AD治療に伴う療養は母親への影響、母親が抱えている問題を早期に把握し、対応するには不十分であったと考える。そこで、スキンケアに焦点を当て、継続的な看護支援、また新たな媒体の開発が必要であると考えた。

現在AD乳幼児を持つ母親の日常生活における管理状況、母親の精神状態に関する実態調査研究、経験的な印象に基づく解説・総説、事例検討などの文献が数多くある。しかし、具体的な看護支援に関する研究が見当たらない。

AD乳幼児は、皮膚のバリア機能が低下しているため、皮膚水分量が健康な乳幼児より少ない。皮膚の状態を観察し判断し、スキンケアの方法を工夫する必要がある。しかし、皮膚の状態を観察し判断することは、ADと診断された間もない乳幼児を持つ母親にとって、容易なことではない。

そこで、本研究では、ADと診断された間もない母親を対象に、簡易測定器材を配布し、日々の測定値、肉眼で観察した皮膚所見を記録する。また、適切なスキンケアが継続的に実施できるため、新たな媒体を作成しスキンケアを中心とした個別的継続的な指導を行う。

また、健康な乳幼児の皮膚水分量の変動を明らかにすることで、乳幼児の皮膚水分量に関する基礎データを蓄積することができ、今後、臨床において、AD乳幼児の皮膚状態、スキンケアの効果を評価するエビデンスを寄与することができる。

2. 研究の目的

(1)健康な乳幼児の成長に伴う皮膚水分量の変動を明らかにする。

(2)AD乳幼児を持つ母親に正しいスキンケア方法を提示する媒体を作成する。作成した媒体を用いて、AD乳幼児を持つ母親のスキンケア能力を高め、かつ、自己効力感を高揚させる母親支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

目的(1) :

非AD群(健康な乳幼児群)には、成長に伴う皮膚水分量の変動を明らかにするため、調査を行った。2か所の保育所にて、研究協力の同意が得られた園児(56名)の皮膚の角質層水分量、皮膚バリア指数を月に1回の頻度で測定した。

目的(2) :

(1)研究対象者:①ADと診断されている、②プログラム開始時、18か月未満である、③アレルギー専門病院の通院歴が1年内である、④定期受診かつスキンケアの必要性がある、

以上の4つの条件を満たしたAD乳幼児とその母親23組であった。対象者は、定期受診日によって、介入群と対照群の2群に分け、介入群は13組、対照群は10組であった。

(2)プログラムの内容

①介入群には、研究者が作成した「スキンケア指導用パンフレット」付きの「アトピー・スキンケア日記」一式を用いて、日常生活におけるスキンケアについて3回の継続的な個別指導を行った。「スキンケア指導用パンフレット」には、『AD患者の皮膚の特徴』、『皮膚の清潔保持』、『皮膚の保護』、『皮膚の保湿(保湿剤の塗布範囲、塗布量、塗布回数、塗布タイミング)』、『かゆみの対策』の内容が含まれる。

プログラムはAD乳幼児の定期受診時の待ち時間を利用して、実施した。毎回の指導には30~40分間を必要とした。指導する際に、2種類の測定器具(スカラ社製のモイスターチェッカーMY808Sとアサヒバイオ社製の角層膜厚・水分計ASA-M2)を用いて、AD乳幼児の皮膚の角質層水分量、皮膚バリア指数を測定し、スキンケア日記の記録内容を参考しながら家庭で行われているスキンケアの見直しを母親とともに行った。保湿剤の塗布方法、塗布量については、実際に、処方された外用薬を用いて、実演式指導方法を用いた。

②対照群には、従来通りの看護援助を受け、介入群と同時期にAD乳幼児の皮膚の角質層水分量、皮膚バリア指数を測定した。プログラム終了時に、希望者に対して、プログラムを実施した。

③両群に対して、研究者が作成した質問紙を用いて、日常生活の中のスキンケアの現状、母親のスキンケア能力を把握した。さらに、育児ストレス尺度(PSI)、一般性自己効力感尺度(GSES)を用いて、その変化を評価した。

4. 研究成果

目的(1)

健康な乳幼児の場合は、季節の変化とともに皮膚の角質層水分量が増加していた。春~夏の季節では、皮膚の角質層水分量が増加し、秋~冬の季節では、軽減していた。幼児後期の子どもは、幼児前期の子どもより、皮膚の角質層水分量が減少する傾向がみられた。

目的(2)

(1)母親のスキンケア能力の変化 :

介入群の母親の1回目指導後、2回目指導後のスキンケア能力の得点はそれぞれがベースラインより有意に高くなった($p < 0.05$)。1回目指導後の母親のスキンケア能力の得点は、介入群が対照群より有意に高かった($p < 0.05$)。

(2) 母親のスキンケアに伴うストレス度の変化：

2 回目指導後に、スキンケア能力の向上した介入群の母親は、スキンケアに伴うストレス度が有意に軽減された ($p < 0.05$)。

(3) AD乳幼児の皮膚の角質層水分量の変化：

前腕中央部の角質層水分量は、介入群のベースライン時が $30.05 \pm 2.91\%$ 、1 回目指導後が $35.14 \pm 2.21\%$ 、2 回目指導後が $34.08 \pm 2.01\%$ であった。対照群のベースライン時が $36.11 \pm 1.68\%$ 、1 回目指導後が $34.13 \pm 2.02\%$ 、2 回目指導後が $32.35 \pm 2.08\%$ であった。介入群の AD 乳幼児の場合には、前腕中央部の角質層水分量には、有意な変化がみられなかった。対照群の AD 乳幼児の場合には、1 回目指導後、2 回目指導後の角質層水分量がベースラインのより有意に低くなり ($p < 0.05$)、さらに、2 回目指導後の測定値が 1 回目指導後のより有意に低かった ($p < 0.05$)。

季節の変化で外部環境の湿度の低下に伴い、AD乳幼児の皮膚の角質層水分量において、対照群は研究終了時の測定値がベースライン時より有意に低下した ($p < 0.05$) が、介入群には、有意な変化が認められなかった。

(4) AD乳幼児の皮膚バリア指数の変化：

介入群の皮膚バリア指導はベースライン時が $29.64 \pm 16.39\%$ 、1 回目指導後が $31.04 \pm 15.29\%$ 、2 回目指導後が $12.76 \pm 6.87\%$ であった。対照群の皮膚バリア指数はベースライン時が $28.49 \pm 8.39\%$ 、1 回目指導後が $27.27 \pm 25.15\%$ 、2 回目指導後が $23.40 \pm 18.91\%$ であった。

両群間には、有意差はみられなかったが、実施群において 2 回目実施後の皮膚バリア指数がベースライン時および 1 回目より有意に低くなった ($p < 0.05$)。非実施群の AD 乳幼児の場合には、皮膚バリア指数の測定値には、時間経過における有意差はみられなかった。

皮膚バリア指数においては、介入群は、2 回目指導後の測定値がベースライン時、1 回目指導時より有意に低くなり ($p < 0.05$)、皮膚のバリア機能の改善がみられたが、対照群には、有意な変化が認められなかった。

(5) 尺度間の関連：

両群間においては、母親の年齢、AD乳幼児の月齢、母親のスキンケア能力得点、母親の一般性自己効力尺度、育児ストレス尺度の得点には有意差が認められなかった。両群の母親の一般性自己効力尺度、育児ストレス尺度の得点は経時的な変化がみられなかった。

(6) プログラムの有用性：

AD乳幼児の定期受診の際に、待ち時間を

利用しプログラムを実施したことは、診療の流れに影響がなかった。「スキンケア指導用パンフレット」の内容は適切であり、「スキンケア指導用日記」の記録率が高かった。母親から良い評価が得られた。本研究のパンフレットは、臨床において母親に対してスキンケア指導を行う際に、AD乳幼児のスキンケアの「基本編」として実用性がある。

さらに、角質層水分量などの皮膚の生理学的データを測定する器具を使用したことは、看護師が根拠に基づいた指導ができ、母親とともにスキンケアの見直しができた。

しかし、研究プログラムに参加した母親から、「スキンケア指導用パンフレット」には、他の母親の経験談や除去食などの栄養を取り入れるニーズがあったため、今後、これらの内容を取り入れる媒体の作成が求められる。

(7) これまでの先行研究では、生活指導用パンフレットやAD乳幼児の皮膚状態を図示できるスキンケア表などを用いて母親に対してスキンケア指導を行うものがあったが、その後の母親のスキンケア能力は医療従事者の視覚的所見、経験上の方法により評価されたものがほとんどであった。本研究では、視覚的所見、経験上の方法と異なり、AD乳幼児の皮膚の生理学的データを用いて評価した。この定量化の方法により、母親は日常生活の中でスキンケアを見直しやすくなり、スキンケア能力の向上につながる。さらに看護師が焦点を絞って根拠に基づいたスキンケア指導が実施でき、その結果、臨床の看護の質の向上につながる。さらに対象者数を増やし、複数の医療機関・診療科の特徴を考慮し、外来看護師を対象とした、対象の個別性を考慮したスキンケア指導についての外来看護の質を高める研究を行うことも求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① カルデナス暁東、アトピー性皮膚炎乳幼児とその家族を支えるチーム医療における看護師の役割、皮膚の科学、査読あり、8 (増刊12)、2009、643-646

[学会発表] (計 3 件)

① Xiaodong Cardenas, Michiko Machiura, Kimiyo Suehara. : Maintaining a skin-care diary to improve the skin-care approach of mothers of infants with atopic dermatitis. 第 1 回日中韓看護学会、2009 年 8 月 19 日～21 日、中国北京市。

② Xiaodong Cardenas, Michiko Machiura, Hiromi Naragio, Kimiyo Suehara : Development and evaluation of nursing care program for improving the atopic dermatitis infants' skin condition. 第24回ICN大会. 2009年6月27日~7月4日. 南アフリカ共和国ダーバン市.

③ カルデナス 暁東 : アトピー性皮膚炎乳幼児とその家族を支えるチーム医療における看護師の役割. アトピー性皮膚炎治療研究会第14回シンポジウム. 2009年2月7日. 日本大阪市. (招待講演)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

カルデナス 暁東 (CARDENAS XIAODONG)

園田学園女子大学・健康科学部・助手

研究者番号 : 80434926